

## 藤樹書院・良知館通信⑪

## 「脩身の重要さ」

志村 洋

藤樹先生は門弟である同志諸生の勉学に資するために、多くの経書の註解を著されました。「論語解」「大学解」「中庸解」「中庸統解」などは和文で書かれ、漢文体のものでは「孝経啓蒙」「論語郷党啓蒙翼伝」などがあります。啓蒙は思想上の解説、翼伝は用語の註記を意味します。

和文で書かれたものは晩年の作で、「翁問答」と同じように大洲の同志の要請によって書かれたもので、そのような事情を推察出来る書簡があるからです。

しかしながら残念なことに「大学」と「中庸統解」は病苦と早すぎる死によって全篇の解に至らずに終わっています。先生の無念は察するに余りありますが、後学の我々にとっても同じです。

先生が、これらの中で一貫して説いておられるのが「脩身」することの重要さです。人間は生まれながらに純一至善愛敬の心を持っていません。「愛敬」は先生にとつては「仁」や「明德」、「良知」などと同じもので、

父母への孝心となつて顕れ、万人に推し広げれば安らかな天下国家の根本となるものです。だが人間にはそれを妨げる意必固我の意念から逃れられない弱さがあつて、その意念が大事なものの真実を蔽い隠し、形だけのものにしてしまいます。それ故に先生は意念を克去して本来の心に復た「脩身」の重要さを説き続けたのです。

意必固我がどういふものかについて述べられているのが「論語解」です。論語に収められた五百余章の言葉から先生が随意に九章を選び出して任意に配列し、「論語」の主意を述べておられるので、論語に対する先生の考え方を知ることが出来るのです。

「論語解」二章目の次の言葉が重要です。

「子、四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母く」(子罕)

先生(孔子)は四つのことを絶たれた。勝手な心を持たず、無理押しせず、執着せず、我を張ることはなかった。

絶つとは力を持って絶去したのではなく、自然のうちに無くされたものである。意は好悪の「私意」で、必はその意を必ず遂げようと期す

「期必」、固は意必にとらわれた「執滞」であり、我は意必固の惑いが深く自分だけがあつて、人のあることを知らない「私己(の欲)」であるとして、藤樹先生は次のように言われました。

『凡心の惑いの根本は全てこの四つにある。各々が煩いを為すのではなく、私意に始まつて必に逃げ、固に留まつて我となる。そしてまた意を生じ、必固我と限りなく循環して意必固我の病となるのである。意必固我は心の癰疽(ようそ)のできものであるから、学んで時に習い、聖門の針葉を用いて治療すれば、凡心の膿が出て心は活発になり、絶四の本体に復つて坦蕩蕩の安樂に至る。聖人の聖人たるところはこの四つを絶つて己の本体を明らかにすることである』と。意念を去る脩身の重要さを説き続けられているのです。現代を生きる我々も戒めとしなければなりません。

## お知らせ

## 中江藤樹・心のセミナーの開催

令和二年度の「中江藤樹・心のセミナー」が、別紙チラシの通り開催されます。コロナ禍のため入場者数等に制限があります。今後、感染拡大の状況によって延期または中止する場合がありますをお含みおきください。

★日時 三月六日(土)

十四時三十分～

(十三時四十五分開場)

★場所 安曇川公民館

★演題

「今、藤樹先生の教えを

どう活かすか」

★講師

東洋大学名誉教授

吉田公平 先生

## 高島藤樹会の「ロゴ」決まる

昨年の第二回常務理事会、及び第二回理事会を経て、懸案となっていました本会の「ロゴ」が、左の通り決定されました。今後、様々な機会にご活用ください。

